教育学研究科・グローバル教育展開オフィス

岡澤節
・比較教育政策学コース
・修士1年

成果の概要

今回のプロジェクトでは、“An Asian University? Intra-Asia Dialogue, Comparative Praxis”を全体テーマとし、京都大学と香港大学それぞれの教員・学生が集まる中で研究発表およびディスカッションが行われました。報告者自身は2日目午前に、“A new direction of political education in Japan”というテーマで研究発表を行いました。

２日間を通じて印象に残ったのは、以下の３点です。

１点目は最終日の京都大学側での振り返りにおいて話題にのぼった、このプロジェクトが国際的であると同時に学際的でもあることの意義についてです。今回、全体としてアジア型大学の探求というテーマが据えられる中、１日目には人文・社会科学の分野における西洋への依存や中国の伝統的な思想の再評価等について、哲学的なアプローチでの議論が中心に行われました。一方で2日目には、教育社会学や教育方法学、高等教育学など各発表者の研究内容について、さまざまな観点での意見交換が行われていました。報告者は日々の研究生活の中ではあまり他領域の学生と関わる機会がなく、また意識的に知見を取り入れることも怠りがちだったので、教育へのアプローチの仕方がこれほど多様であるということに感銘を受けました。自身の研究テーマに対しても普段は実証的な方向に目が向くことが多いのですが、今回のプロジェクトでの経験を通じ、哲学的・理論的な考察を踏まえて自身の立場を設定することの重要性を強く感じました。

２点目は、「アジア」という概念の難しさについてです。アジアと一口にいっても幅広く、文化だけでなく言語的にも多様な発展を遂げています。今回は英語での議論が中心に行われましたが、「アジア」を語るときにどのようなアプローチが適切なのか、今後も考えていきたいと思います。

３点目は、報告者にとって初めての海外かつ英語での研究発表を経験したことで、共通の前提がない相手に自分の研究関心を的確に伝えるための工夫の必要性と、英語でのアウトプットの経験の必要性を身に染みて感じたことです。諸先輩方の研究発表を聞くことで、10分間という短い時間の中で、研究関心が近い訳ではない聞き手に自身の研究を伝えるためには、情報の取捨選択や聞き手への問いかけなど、相手を想定した入念な準備が必要であることを改めて学ぶことができました。また、発表後のディスカッションや休憩時間の交流を最大限に意義のある時間にするためには、自身の考えを短い時間でまとめ、それを英語で的確に表現するというアウトプットの力が非常に重要であることを実感しました。この力は経験を通じてしか身につけることができないものであり、まだ研究成果のない修士１回生の院生に対して、このような機会を与えてくださったことに、この場を借りて深く感謝申し上げます。